



自転車社会の環境改善を目指して No.63

“おやこ自転車”の立場から

文

ぼちぼち自転車くらぶ
自転車活用推進研究会会員

やまが なおこ

自転車活用推進研究会 事務局：
〒141-0021 東京都品川区上大崎 3-3-1 自転車総合ビル4階
TEL 090-5301-3207 FAX 03-6409-6803
URL <http://www.cyclists.jp/>



はじめまして！ ぼちぼち自転車くらぶと申します。子どもを自転車に乗せるようになって初めて「どこを走ったらいいの？」と疑問を感じたことをきっかけに、自転車ツーキニスト・疋田智さんの監修で、『おやこで自転車はじめてブック』という本を2015年に出版させていただきました。その後、編集の仕事のかたわら、「おやこ自転車」にまつわる活動を続けています。

自転車活用推進研究会に入ってから年数も浅く、スポーツバイクには乗ったこともない生活自転車愛好家ですが、親としての立場から、これまでの活動とそこで考えたことを書かせていただきます。



『おやこで自転車はじめてブック』
子どもの未来社刊

わかっているけどできない 「車道の左側」

本づくりの過程で、子乗せ自転車利用者を対象にアンケートを実施しました。「車道の左側」という自転車のルールをおよそ8割の人は知っていました。しかし、それを実践している人は1割未満。「子乗せ自転車では車道は無理」「車道は危なくて子どもには走らせられない」と、多くの保護者は感じていました。

実は先の疑問を持つまで、私自身は「自転車は車道が原則」を意識したことがありませんでした。ですが、いったん車道走行に慣れると、段差や障害物の少ない車道は、じつは歩道よりも走りやすい面もあると実感しています。また、子どもが幼いころ、歩道をすり抜けていく自転車になんどもヒヤッとさせられた経験からも、できれば自転車は歩道でないところを通るのがいいと思います。ただ、今現在のクルマの交通量そのままでは、子乗せ自転車や子どもにも「原則車道」を徹底するというのは少し無理があると感じます。

現実的には、本連載で盛岡マナーとして紹介されていたり、『おやこで自転車はじめてブック』で疋田さんも提案されているように、まずは歩道にお

いても「自転車はクルマと順行」を徹底させていくことが、狭い歩道上でのすれ違いによるふらつきや接触事故を減らし、自転車はクルマの仲間だと子どもに教えるうえでも、無理のないステップではないかと思います。

子どもに教えるためにも 親自身が学ぼう

「親になったらもう一度自転車を学ぼう！」は、自活研理事の北方真起さんが立ち上げた「おやこじてんしゃプロジェクト」のキャッチコピーですが、とても共感するフレーズです。子乗せ自転車に乗る親自身も、子どもたちも、事故の被害者にも加害者にもならないためには、親自身が自転車について学び、子どもに伝えることが必要です。本づくりを通じて知ったさまざまな自転車のルールや安全利用のコツ、事故の実態などを多くの人とシェアしたいと、本の発行後、未就学児の保護者を対象に私も「おやこ自転車ワークショップ」を実施してきました。

その内容は、①自己紹介、②自転車にまつわる意見交換、③これだけは知っておきたいこと3点の情報提供です。情報提供では自転車の交通ルールの原則「車道左側(+左側の歩道)」とヘルメットの重要性、そして参加対

	現在	未来
ポジティブ	<p>楽しい！いいな！と思うこと</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自由を感じる ・季節や風を感じられる ・子どもとの移動が楽 ・行動範囲広がる ・自分の力でどこでも行ける ・達成感！ ・お金がかからない ・子どもの頃の冒険思い出 (川を渡る、1人で遠出、休日早朝の都心散走…) ・親の自転車後ろに乗って買い物の思い出 	<p>自転車や交通環境について もっとこうだといいな！と思うこと</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自転車レーン拡充（途中でなくなり残念） ・自転車レーンと車道隔てるものがほしい ・電柱地中化（幹線道路より街路でとくに） ・クルマと理解しあい仲良く走りたい ・学校等でもっとしっかり自転車交通教育 ・歩道はもっとフラットに（ベビーカー大変）
ネガティブ	<p>ヒヤッとした体験</p> <ul style="list-style-type: none"> ・段差で転倒 ・車道に石があり転倒 ・子どもの乗降時バランス崩す（電動アシスト） ・雨の日、ポンチョで視界悪く転びそうに ・リアシートで子が動き、怖い ・車道で幅寄せ（自転車レーンでも） ・自転車が倒れて子が落ちるのを目撃 	<p>知りたいこと・困りごと</p> <ul style="list-style-type: none"> ・車道は子乗せではムリ、怖い ・子どもに車道走らせられない ・中学生になってから車道というのも困難 ・ヘルメットは義務ですか？ (被らせてない人が多いから、わからない) ・歩道でも車道でも自転車は肩がせまい

田の字法で出た意見の例

象に合わせて子乗せ自転車の選び方や、子どもに教える際のポイント等その都度変えています。

限られた時間で、すべて伝えることはできないので、ワークショップのねらいは、「自転車を意識化する」ことが中心です。そのためには、参加者自身の体験や思いを引き出す②の部分を中心にしています。

そこで意見交換では、田の字法というミーティング・ファシリテーション技法を用い、左右の枠で現在と未来、上下でポジティブとネガティブという4つのテーマを設定し、左上から反時計周りに意見や体験を出し合います。

まずはじめは、「自転車にまつわる思い出やいいなと思うこと」です。参加者からは、子どものころの自転車での冒険や、親との思い出、初めて自転車に乗れたときの嬉しさなど、毎回わくわくするようなエピソードが出てきます。

次に「ヒヤッとした体験」と、「知りたいこと・困りごと」を出し合います。ここで出てくる疑問についても、できるだけ参加者から助言や答えを募ります。

最後は「自転車や交通環境についてもっとこうだといいなと思うこと」です。

このようにして、未来についてのポジティブなイメージを共有すると、ただ、「ルールだから守るべき」ではなく、社会的に不都合なルールや環境は変えていこうというような市民意識も共有できるのではないかと思います。

また、親が自転車への理解を深めれば、子どもたちにも伝わるのが期待でき、教育効果も高くなると考えられます。田の字法はだれでも実施できるファシリテーション技法なので、ぜひ参考にしていただけたらと思います。

子どもにとっての自転車 自立心と社会性を育むもの

『子どもの貧困』（阿部彩、岩波新書）という本のなかで、12歳の子ども普通の生活に自転車は必要かという問いに対し、イギリスでは一般市民の55%が必要と考えているのに対し、日本の一般市民の6割は「家の事

情で与えられなくても仕方がない」と回答したという調査結果が載っていて、非常にショックを受けました。

子どもにとって自転車は冒険であり、親子のコミュニケーションであり、未来が詰まっていると疋田さんはコラムに書かれています。小学生となったわが子を見ても、自分の力で移動し、公共の場で親とは別に行動をするという成長のかたわらに自転車があると感じます。

また、自活研の研究会でお話を伺ったデンマークの交通教育専門家ロッセ・ベックさんによれば、デンマークでは自転車とは子どもの心身の発達を助け、自立心と社会性を育てるものと考えられ、そのため社会全体で、自転車教育と走行環境整備に両輪として取り組んでいるとのことでした。なんとも大きな隔たりです。

自転車は、都市部で子育てする私にとって、頼もしい子育ての相棒でした。これからも自転車に乗り続けたいし、この楽しく、健康にも環境にもお財布にもやさしい、コミュニケーションのある乗り物を、次世代の子どもたちにも楽しんでもほしい。そのために、まだまだやれることがたくさんあると感じています。だれもが排除されず、どのような乗り物もお互いに敬意を払いながら安全に快適に移動できる交通環境実現にむけて、これからも活動を続けていきたいです。

だれでも閲覧できるFacebookページ（「ぼちぼち自転車くらぶ」で検索）では、親子に役立つ情報を発信しています。3月には、『おやこで自転車はじめてブック』を指定する人などに贈る「春の安心を贈ろうキャンペーン」を立ち上げる予定です。子乗せ自転車に乗り始める人へのプレゼントなどにご活用いただけましたら幸いです。